

ドクターNAKAMURAの 健康道場



Vol.69
突然の訃報

「古川さんが死んだ。」

「えっ！」

「古川さんが亡くなったの。」

「どういう事、姫。」御手洗と山部が一斉に姫に顔を向ける。

「末期肺癌で自宅療養していると聞いたのでお見舞いに行ったの。奥様と穏やかに話をされていたわ。こんなに早かったとは・・・。」

「はい、どうぞ。あなたの好きないちごを買ってきたわ。この紅ほっぺおいしそうよ。」

優子の言葉に軽くうなづく古川。

「どう、食べてみる。」

差し出された透明のガラスの器に粒のそろったいちごがあふれている。力なげに手を伸ばし、いちごを一粒口にほおばった。

「どうお。」

妻の問いに軽く頷く古川。しかし、末期癌の古川には霞んでよく見えな

い。味もよく分からない。ただ、噛んだ時に口の中で水分が広がる感覚だけが微かに伝わってきた。

そして妻の問いに軽く頷いて、何気なく窓に顔を向ける。

「桜がきれいでしょ。」

窓からは満開に咲き誇った桜が陽に照らされている。が、古川にはよくわからない。白い斑点が空中に幾重にも重なっているようにしか見えない。

「今年も桜をみれた。生まれて47回目の桜。」

力なく笑う古川。斑点模様から、かつての記憶をたどり桜の花びらへと描写している。

今日、古川の妻 優子から姫の携帯に連絡が入った。

「息を引き取る瞬間まで家族と話をしていた、静かに息を引き取りました。姫さんがお見舞いに来て下さったことを主人は大変喜んでおりました、姫が見舞いに来てくれたおかげで寿命が少し伸びたかなって笑顔を見せていたくらいなんです。本当に有難うございました。」

言葉を失う姫に優子は静かに受話器を置いた。

そよかぜ 循環器内科・糖尿病内科
(県立中央病院 前)

院長 中村陽一